



いし、アンドレ・ランジュバンの「Dest Over the City」でさえ親近感を抱く。だが、デュシヤルムの「The Swallower Swallowed」やアブレの「A Season in the Life of Emmanuel」のような大げさな——無法とさえいえる——作品に対しては、そんなに心の底からこれを受け入れるとはとても言いがたい。

アイテンテイテイの危機、独立への動きなどにより根底から揺さぶられている社会にあつては、作家がかつての小説の特徴であつた堅実、安全、真実といった印象を与えることはできなくなったのである。

ここ数年の政治的事件、社会的変化は、小説界にも変化をもたらした。一九七六年のケベック党政権の誕生も、また影響を及ぼすだろう。モントリオール国際ブックフェアを組織したJ・R・Z・レオン・パトゥノードがまさしく言ったように、「今やわが作家たちが権力を握っている」のだ。

すでにいくつかの変化が見られる。一昨年十一月十五日の選挙以後、政治的独立を唱えた本も、北米社会全体あるいは

もつと広く世界のフランス語圏全体の中で新生ケベック社会がどんな役割を果せるかなど、新しいケベック社会を論じた本が多数出版された。これらを眺めるとき目につく共通の特徴は、全体の調子は過去のものより穏やかで、一九五〇年代の論客のように独断と攻撃性に満ちた分析をしていない点であろう。危機はすでに過ぎ去り、反省の時機に入ったのかもしれない。

別の現象もある。レ・エディション・カンズ社の重役で、精力的な若手出版業者であるピエール・テュルジョンの指摘するところによれば、「ジュワル（フランス語系カナダ人のスラング的フランス語）がだんだんと姿を消してきた。先シーズンに送られてきた原稿は、大半が正統なフランス語で書かれている。要するにスラングには皆がもううんざりしているのだ。初めの頃は政治的に有用だったスラングだが、今では特にその意味はなくなったのである。

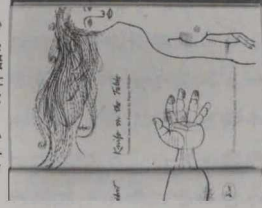
小説の主人公も、新しいタイプがあらわれてきている。たとえば、ジャック・ゴドブーの最新作「Le Dragon」やロジエ・フルニエの最新作「Les Cornes Secrètes」がそうだ。いずれもベセツトやデュシヤルムの「アンチ・ノベル」とは、属する時期も世界も違う。フルニエは次のように筆者に語った。「僕の初期の作品では、いつも主人公を最後に死なせていた。それが自然であり、不可避なことだと思われたからだ。ところが「Les Cornes Secrètes」は勝利者の話だ。僕は神話的な英雄、超人的英雄が必要だと感じて、古典文学でお目にかか

るような英雄を創り出した。「Les Cornes Secrètes」は詩的な寓話ともいふべき小説で、とにかく楽しく、異教的で、ひどく生き生きとしている。フランスの批評家はこれを高く評価して、フルニエを「ケベック人最初の偉大な作家」と呼んだほどである。

ケベックの出版界はフランスと大きな競合関係にあるが、それでもかつてないほど活況を呈している。この点では、英米の出版業界と厳しい競合関係にある英語系カナダの出版界の状況に問題が似通っている。

ケベック州の出版業者は、もうひとつの重要な文学活動の面にも活発に組みはじめた。つまり米国や英語系カナダで出版された本をフランス語に翻訳出版する

ゴドブーの作品から



仕事である。昨年、アラン・スタンケ・インタナショナル社は、ジェームズ・フエラン著「Howard Hughes: The Hidden Years」（ハワード・ヒューズ——「隠された年月」）の世界中の仏訳権を買いとつたし、米国の前大統領リチャード・ニクソンの回想録に関しても同様の権利をオプション契約した。エディション・カンズ社も最近、「ロッキ」のフランス語版を出し、これはケベック州でもフランスでもよく売れている。そのほか、セルクル・デュ・リアール・ド・フランス社では、英語系カナダの作家、ロバート・ソン・デービスやモトリー・カラハン、W・O・ミッチェルなどの古典を仏訳し

た「コレクション・ドゥー・ソリタチエーロ（二つの孤独選集）」を出版している。

「ケベックの出版業者が文学作品だけを扱うというのは、事実上不可能なことだ」とピエール・テュルジョンは語る。

「出版物の多様化は絶対に必要だ。実用的なガイドブックや料理の本などは常によく売れる。そこから得た収益で、出版業者は才能ある若手作家の作品を世に出すというリスクにも、あえて挑むことができる。」

純粋に金銭的な面からいえば、文学作品の出版は、実用本のベストセラーによって支えられているということになる。しかしながら創造性という面では、ケベック文学はすでに自主独立を達成し、そして世界のフランス語圏に認められつつある。英語系カナダにおいても、翻訳のおかげで、ケベック作家（小説家や詩人たち）の作品が次第にその存在を知られるようになってきた。ケベック文学は、漸くにして陽のあたる場所に出る準備をしはじめた。それは、フランス語系カナダのイメージに合う場所——つまりアメリカとヨーロッパの巨人たちの間にはさまれて、歴史が産んだたつた五百万という民族に合う場所かもしれない。だがこれはまことに地の利を得た場所でもあつて、西欧の偉大な文化の中に、独自の、いわば特権的な視点を与える意義を持っている。

（ジョルジュ・ル・エーベル・ジエルマンはモントリオールの「ラ・プレス」紙のコラムニスト）